令和3年度　NO. 10

駒岡小学校だより　２月号

駒岡の風景から見えたもの

副校長　霜田　恵子

新型コロナウイルスの感染が再び急拡大し、まん延防止等重点措置がとられております。学級閉鎖・授業参観の中止・学校報告会や学校運営協議会の紙面報告等、皆さまには急な連絡をさせていただくことになりましたが、ご理解いただき、感謝申し上げます。

なかなか収束しないこのような状況で不安な気持ちになりがちですので、私の印象に残った駒岡のまちの風景からみえた心温まるエピソードを紹介したいと思います。

初夏の頃だったでしょうか。バス通りの交差点で信号待ちの児童が歩道からはみ出し、車が急ブレーキをかけたとお叱りのお電話を受けました。危ない場面を見かけた地域の方からの電話でした。「あんなことをしていたらいつか命を落とす、きちんと指導してほしい。」とまるで我が子のことのように心配してくださったのです。はじめはその剣幕に戸惑いながらお話を伺いましたが、相手の方の気持ちを想像しながら聴いていると、本校児童を心配するが故の厳しい口調だということが伝わってきました。駒岡にお住いの地域の方が駒っ子を守ろうとしてくださっている…実は、とても有難いことでした。

１２月の中旬のことです。職員室の電話が鳴って、地域にお住まいの方から本校の高学年女子児童二人が公園のごみを拾っていたことを知らされました。ごみを拾った本校児童もとても偉いですが、それをわざわざ知らせてくださったその方の温かい心とさり気ない実行力も素晴らしいと私は思いました。聴けば、両手いっぱいになった児童に袋を提供してくださったそうで、なぜ拾うのか問うと「クラスメイトが落とした物だから…」と答え、当たり前のように拾っている姿に感心したとおっしゃったのです。小さなお子様のお世話でお忙しいでしょうに、学校の電話番号を調べて伝えてくださいました。有難いことです。

３つ目のエピソードです。１月のはじめに４年生の教室で係活動について話し合いをしているところに居合わせた私は、ある児童が「注意係なんて要らない。注意するだけの仕事なんて意味ない」と呟くのを耳にしました。確かに人を注意する仕事をするより、互いに良いところを認め合うほうが、明るい気持ちで楽しく過ごせそうです。その場で私も同感であることを伝えました。対立を生む「注意」より、互いの成長を思う温かい「忠告」のほうが効果がありそうです。仲間からの忠告を素直に聞き入れることのできる関係性を築いていきたいと改めて思いました。対立するより、認め合い高め合う仲間意識をもっていたいものです。子どもの言葉から大人が学ぶこともあります。これも有難いことです。

暗いニュースが多い昨今ですが、家庭と地域と学校とで「駒岡の宝」である子どもたちを育んでいくことができたら…と思います。アドラー心理学でいう「共同体感覚」をもって、この難局を乗り越えていきたいと考えております。

今後とも、皆さまのご理解ご協力をよろしくお願いいたします。